

琉球大学学術リポジトリ

[巻頭言] 「農業と農学」 一研究に明確な出口を
! —

メタデータ	言語: ja 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 垣花, 廣幸 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015559

「農業と農学」 — 研究に明確な出口を！ —



垣花 廣 幸

1999年に制定された食料・農業・農村基本法において、農業に関する技術の研究開発は、これまで以上に重要な政策として位置づけられている。この研究開発の重点は、①生産力の向上につながるような現場を支える技術、②生命科学研究など農業技術の革新が期待される技術、におかれている。また、BSE問題を発端とした「食の安全」を求める社会的要求の高まりに応じて、農林水産省は今年消費・安全局を新設した。

一方、2001年には国立農業研究機関が独立行政法人化され、2004年には国立大学の独立行政法人化が予定されるなど、農業研究を取り巻く環境も激変している。

振り返って、沖縄農業の実態はどのようなものであろうか。近年特に著しい農業就業人口の高齢化と後継者不足、輸入農産物の増加や産地間競争の激化に伴う農産物価格の低迷などの影響もあり、農業粗生産額は1985年度の1,160億円から2001年度には909億円に減少するような苦境に立たされている、というのが沖縄農業の現状である。

以上のような背景を踏まえると、生産者・消費者を含め県民生活と密着した「農業」が「業」として成立し、持続的に発展するためには農業研究者の貢献がますます重要な意味を持ってきている。

いうまでもなく、農学は実学であり、技術開発のための自然科学と経営評価などの社会科学が車の両輪となって総合的に研究を進め、その成果を広く現場に普及しなければ「農業」の発展はあり得ないのである。

この意味において、実用化研究であれ、基礎研究であれ、農業を支え発展させる農学、という出口は明確であり、各人の研究テーマが「農業」発展への貢献という出口に対して、どの位置にあるのかを考え、その研究の持つ意味・位置づけを明確にしておく必要があるのではなからうか。

ここ数年来、沖縄農業研究会の大会において、農林高校生諸君が地域における身近な問題を発掘・調査研究し、講演発表していることに対し、非常に新鮮なものを感じるのには小生だけであろうか？生徒諸君と指導教員の努力に敬意を表するものである。

自戒を込めて、農業現場が求めているものは何なのか？問題点はどこにあるのか？我々が研究開発し発信した技術の現場への貢献度は？などなど、今一度原点に戻って農業技術・農業経営を見つめ直すべきではないかと感じている。

「釈迦に説法」という気がしないでもないが、沖縄農業研究会会員諸氏の農業研究がさらに進展し、もって「業」としての沖縄農業の持続的発展に大きく寄与することを期待するものである。